

佐々町志方免 上ノ久保集落を訪ねて



鳥屋城跡として知られる城ノ辻山のすそのに開けた田園地帯に江迎方面へ走る県道227号線が通っている。佐々インターを降りて直進、佐々川大橋から1.5キロほど登ったところで左に入る山道がある、そのまま山道を登り、最初の分かれ道を左に登ると視界が開ける場所にでる。佐々町の人でも知る人が少ないという、下を走る県道からはその存在すらも分からない、いわば隠れた山里である。

6戸ほどの寂しい集落ではあるが、ここは佐々町民に昔から慕われている戦国時代に活躍した2人の英雄の生い立ちに関わる重要な場所である。

また、県道は北上すると江迎へ、西に進路を変え盲目ヶ原を越えると鹿町へと抜ける峠を通過しており、昔から使われていた古道で、他に佐々へ出入りする道は平戸街道としても使われた江里峠のみだった。交通の便でも重要な拠点であったこの地を古来から紫加田氏の一族が住処にしていた。

今回5月31日に行われる佐々パノラマさるくの下見も含めた調査を佐々さるくのメンバーと佐々の郷土史家舩さんと共に行った。

たまたま畑作業をされていたこの集落に60年住まれている古老に話を聞くことができ、新たな発見もあったのでレポートしたいと思う。





千人堂

1563年(永禄6年)に平戸松浦氏と宗家松浦氏との戦いが起こり、佐々も志方も平戸軍に属したが、大敗し、討死したり自刃したり捕らえられて大勢が亡くなったと伝えられる。

この時の半坂合戦で討死した豪僧伝育坊は志方の庵寺で育ったと伝えられている。死後その位牌は東光寺に祀ったが、後日志方に妖怪変化が現れるので、伝育坊の靈魂が迷っているのであろうと察した村人達が、伝育坊の生まれ故郷である志方に堂を建て、伝育坊の位牌をここに移したところそれ以来平静になったという。これが千人堂の起源とされている。

千人堂内には位牌が残されておりその表面に「**当庵開基撫育伝育坊首位**」と書いてあり、裏面には「**永禄6年11月5日半坂合戦の時、大野治郎左工衛門定晨に従い、威力を振って戦い死す。甲冑長刀、鉄棒を当庵室に納む、志方千人堂講中、明治二十八年八月十三日 寄贈主 畑常四郎**」という意味合いが書いてあるという。講中とは同じ信仰者の集まりであり、ここでは千人堂講中と名付けて集落の人々が結束して信仰することで集落の親睦を深めていたのであろう。

高さ40cmの黒漆塗りの位牌は、上記の記述どうり明治28年に再調したものと思われるが、その位牌も痛みがひどかったので昭和47年に宮原賢三氏が新しい位牌を寄贈している。また甲冑長刀、鉄棒を当庵室に納むと記述してあるが、実際は東光寺に納めてあったという。

実はこの千人堂こそが東光寺の末寺、太瑞庵であり、それを実証する記述が書かれた棟札(建立を記録した板)が堂内にあるという。

現在の建物は平成11年3月に弓井寅雄氏が発起し再建したものである。また堂の横にある新しい供養塔は近年弓井氏が建立したものと思われ、その横にある3つの古い石塔は、伝育坊の墓と伝わる前川家の裏山にある石碑以外に八ノ久保周辺にあったものを千人堂の敷地に移し祀ったものと思われる。





千人塚(ほくとさまとも呼ばれている)



東光寺北側墓地にある紫加田嫩秀美濃の墓(作永家墓地内)

千人塚(ほくとさまとも呼ばれている)

今回訪ねた地元の古老の話によるとこの墓こそが志方美濃守の墓であるということだった。

当時の有力な武将に見られるお墓の造りで四角形の石積の土台の上に一部が欠損した宝匡院塔が鎮座している。またその場所が上の久保集落を見渡せる高台にある事からもこの地域の実力者の墓であることがわかる。

平戸の松浦資料館所蔵の系図には、「美濃守の墓は東光寺下の田畑に在り」と書いてある。

現在、東光寺墓地(作永家内)にある志方美濃守の墓と伝わる五輪塔(わずかに宝匡院塔化している)は元々は国道204号線沿い三叉路の場所に作永衣料店(現在自民党佐々支部)があり店の横にあったものを佐々橋に至る道路が出来る際に今の場所に移したものである。その際、墓石の下を掘って見たが何もでてこなかったという。そして、現在は風化して読み取ることはできないが、墓碑には「桂山嫩秀(けいざんどんしゅう)」と筆細の四字が彫ってあったという。

志方美濃守は古くから紫加田嫩秀美濃守の名で言い伝えられており、生前から嫩秀と名乗っていたものか、死後に生前の名前と戒名を結びあわせて「桂山嫩秀(けいざんどんしゅう)」としたのかは不明であるが(頓首美濃守と当て字をしたり、呑州と書いた時期もあったという)、系図に書かれた位置と墓碑に彫られた戒名からも現在東光寺墓地にある墓が志方美濃守の墓であることは間違いない。とすれば古老がいわれる千人塚の美濃守の墓は誰の墓なのだろうか……

私なりの結論は、美濃守には2つの墓碑があり、その位置からして東光寺墓地(元は国道沿いにあった)の五輪塔が美濃守が討たれた場所に建てられた供養塔で、千人塚の墓碑が亡くなった美濃守の亡骸を葬ったお墓ではないだろうか。

「ほくとさま」とは北斗七星に由来するものなのか、それとも別の言葉がなまって生まれた言葉なのか、はたまた美濃守の奥方の名前がそうなのか、いずれにせよそこに答えが隠されている気がする。

志方氏末裔の墓石群(黒髪神社)

千人堂から東へ100メートルほど竹林を歩くと椎の巨木が現れる。幹まわり6メートル余、樹高20メートル余、北松一帯でも最大であるこの巨木は戦で亡くなった者達の血を吸って大きくなったとの言い伝えがあり、確かに推定樹齢800年の老木は当時の凄惨な様子を目撃者でもある。

その椎の巨木のもとに墓石群がある。石碑文を読んでも比較的新しい2基の宝匡院塔は向かって右が「紫加田美濃守ご一族の墓」左が「北斗様二夫婦の供養塔」そして真ん中の小さい自然石は「美濃守第二子左近様首石」と書かれている。右端には紫加田一族ご家来衆の墓と、敵味方一切を合わせた供養塔が建てられている。いずれも紫加田一族に関係するもので紫加田氏の末裔と思われる川内野氏を中心とした迎氏・内野氏などの方々が建立したということのようである。昭和49年から52年にかけて建設されたようでこの場所を称して黒髪神社と書かれてある。近辺の古老の話によると川内野氏の旧家が以前はこの広場にあったということである。

一説によれば戦国時代にはこの広場の上の方に美濃守の館があり、この場所は馬場の跡という話も聞いたことがあるが定かではない。

気になるのは中央自然石の後ろに建つ「お園様並御家族」と書かれた石塔である。後ろを見ると昭和52年9月建立としている。碑文の建立が昭和50年4月4日と記されており、この石塔は碑文の2年後に建てられているので詳しいことが分からない。今後、川内野家の方にお会いする機会があればまた新たな発見があるかもしれない。





やぜまち

矢が飛んできたことに由来すると言う。観音峠方面から攻め上がってきた敵軍が放った矢がこの地に降ってきたことを想像させる。

切りぜまち(人切畝町)

かねてより謎であった千人切りの場所が今回訪ねた地元の古老の話により確認できた。千人堂から500メートルほど離れた3アール(30m×30m)ほどの田んぼという郷土誌の記述と合致する場所である。

ここで千人もの武士の首が切られその流血が多すぎて畔を越えて流れ出た程だったという背筋の凍る悲話が残されている。実際は千人というのはその数の多さを伝えるもので、1000人ではなかったにしろ、この時期に行われた宗家松浦との戦いで武将40人雑兵400人程が戦死した話が伝わっており、多くの志方一族が宗家松浦の猛攻に合い、この地で自害または討ち死にしたと思われる。

ながりや

「流れ矢」が訛った言葉だと思われる。その名のとおり、やぜまち・切りぜまち辺りで放たれた矢の残りが志方川を流れてちょうどカーブの所で矢がたまったことからそのような地名が付いたものと思われる。

これら3つの地名は小字にも、もちろん現在の地図にも記されていない。上の久保地区周辺の人々が昔から口伝に伝えてきた地名である。それだけに真実みがあり、ここで起きた凄惨たる有様を、椎の巨木、堤の石碑、千人塚などの古色蒼然な史跡達と共に物語っている。そしてなにより、この地に漂う鬱蒼とした靈気のようなものが今なお私たちに当時の凄惨さを伝えているようである。

「志方破れ町千人堂は地獄 見ゆる所は雲ばかり」

いつ頃か作者も不明だが佐々にはこのような歌が残っている。





正面から



五輪塔の火輪部分



背後から

新たな史跡の発見

近所の古老の話によれば、昔は新堤と呼ばれる堤の上段の伝育坊の生家跡と伝わる畑ときりぜまちの場所にあったそれぞれ2つの祠がアスファルトの道が整備された際に堤から一段上にもともとあった祠に移され、ひとつにまとめられたということだった。

早速探したところ、堤の土手の上の畑の中に3基の板碑と五輪塔の火輪部分と思われるものを発見した。雑草に埋もれてはいるが、集落を見渡すようにしっかりと建っていた。

どういった云われがあるのか、おそらくは石版に刻んであったであろう文字も風化が激しく読み取れない。

この堤の付近に伝育坊の生家があったという言い伝えもあり、伝育坊と何かしら関係のある史跡なのかもしれない、また舗装された道路を挟んで100メートル程下ったところの畑が「きりぜまち」と呼ばれる場所でもあることからその時の戦死者を祀った墓石という可能性もある。

いずれにしても相当に古い史跡であることは確かで特に五輪塔などは中世に造られたものと思われる。